

財団とは？

理事長 岡本 正

OSFの奨学生A君が某社の入社試験の面接に行った時の話。
会社担当者の質問。「君は将来何を希望していますか」

A君の答え。「財団を作って、困った人を助けたいと思います」
会社の担当者はずいぶんびっくりしたことだろう。

A君曰く「日本へ来るまで、財団については全く知らなかった。OSFから奨学金を受けるようになって、初めて財団の価値を知った。私も将来資金を作り、財団を創設したい」

なんとうれしい話ではないか。私は感銘深くその話を聞いた。

財団が一般に普及している国は、もちろんアメリカ。次はヨーロッパ。残念ながらアジアには少ない。日本の場合戦前からあったが、最近になり徐々に増加してきた。だが、欧米には到底かなわない。

財団には公的財団と私的財団があり、前者は国、県、市などの公共団体が税金で作ったもの。後者は民間の会社、個人が設立したもので、OSFやロータリー財団などは無論後者で、公的などところからは全く援助を受けていない。

私が少年時代に読んだ物語を紹介する。

十九世紀のアメリカ開拓時代。ペンシルベニアの田舎町のある教会の牧師さん。彼は教会の改修するのに、寄付金が思うように集まらなくて困っていた。ところがある日、貧しい少年がリヤカーにいったばいのレンガを持ってきた。

少年曰く、「ぼくは貧乏なので寄付は出来ません。代わりにアルバイト先のレンガ工場に頼んで、レンガを分けてもらいました。教会の工事で使ってください」

この話が町中に知れわたり、大人たちは反省し、改修費はたちまちのうちに集まった。これはアメリカの鉄鋼王、カーネギーの幼年時代の話だ。彼はスコットランドからの貧しい移民の子だったが、鉄鋼で巨万の富を得て、世界トップクラスのお金持ちになった。

しかし、彼が世界の歴史にその名をとどめたのは、むしろその富の処分方法である。多くの財団を作り、資産のほとんどを社会公共のために支出したのだ。有名なニューヨーク五番街にあるカーネギーホールもその一つだ。

財産ができたら寄付しよう。これではなかなか財団は作れない。貧しい時から人のために、公共のためにお金を出すという良識と社会慣習が大切である。

昔、南カリフォルニア大学の前にあるホテルに泊まった時、朝早くキャンパスを散歩したことがあった。大学には講堂、教室、研究所など数多くの建物がああり、それぞれの正面に「○○ホール」と名前がついていた。聞いてみると大学OB、財団など寄付者の

名前とのこと。日本の大学でも例えば、東大の安田講堂は、八十年前に安田財閥の寄付によって建てられ、また、図書館はロックフェラー（石油王）の援助でできたものだ。

カーネギーの墓には「自分より優れた多くの人々の協力により、幸せに過ごした男、ここに眠る」と刻んである。見事な人生だ。

アジアの各国に数多くのカーネギー財団のできることを楽しみにしている。がんばってください